

NOW IS.

宮城は^{いま}現在も
^{いま}現実に
立ち向かう。

Vol.
23
March, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

熊谷育美・in
気仙沼





Fish Market 38* 代表の福田佳代子さんとともに。

やさしい歌声の源、あたたかな港町。熊谷育美さんと故郷・気仙沼を歩く。

被災地に足を運んで「今」を見てほしい

「私にとつての気仙沼は、陶芸家にとつての窯みたいなもの。ここで曲を作るのが当たり前なんです」。熊谷育美さんは、生まれも育ちも気仙沼市。シンガーソングライターとして活動する



案内してくれたスタッフの「熊谷」さんも、熊谷育美さんの知り合い。震災前の写真を見て「この建物懐かしい」と話していました。

今も、この地に住み続けています。「気仙沼のいいところやっぱり人の良さかな。頑張れよって言ってくれる、地元の人たち」に育ててもらいました。

この日最初に訪れたのは、唐桑地区にある「津波体験館」。東日本大震災の映像を見ながら音や振動で津波の恐ろしさを体験できるほか、当時の写真パネルなどを展示しています。熊谷さんは地震が起きたとき、気仙沼港のすぐそばで番組のロケ中でした。パネルを見ながら「ここ」と指をさします。山沿いにある自宅に帰って、数分後に津波が来ました。さっきまでいたところが、あつという間に海の底になって。ああいう時って感情が生まれにくいんですよ。悲しいと

か辛いとか何もなくて、ただ、ああ……」

震災の5日後、仕事の都合で上京したものの、すぐに気仙沼に戻ります。「とにかくみんなと一緒にいたくて。ボランティアで泥かきしてたんです。そしたら、地元のおじさんに『おめ、何やってんだ、こんなところで！』ってすごく怒られて。お前はお前のできることが他にあるだろう！被災地のことを伝えてこい！って。ハッとされた熊谷さんは、呼ばれたと



安波山の展望台にて「新緑や紅葉の季節もまた、美しいですよ」

「7年たつてようやく震災後のことを振り返られるようになりました。その時書いた曲を聞くとき、当時の気持ちを思い出しました。」



ころにはどこにでもモットーに各地に足を運ぶようになりました。「とにかくがむしゃらに伝えようって。今もその気持ちは変わりません」。

気仙沼のこれからを一緒に歩んでくれたら

知人や友人が気仙沼に来た時、熊谷さんが案内する場所があります。気仙沼の市街地から離島・大島までを一望する「安波山」です。「山が海を抱いているようなリアス式海岸のこの海、いいでしょう？一度来れば、きつとみんな好きになつてくれ

最後に訪れたのは Fish Market 38*。個人で小船を



「MAST HANP」ショップにて熊谷さんのお気に入り、この日のバックもこの店の製品。気仙沼出身のオーナーが作る帆布製品が並びます。

PROFILE

熊谷 育美
くまが いいくみ



1985年、宮城県気仙沼市出身。中学時代から曲を書き始め、シンガーソングライターとして活動するほか、ラジオDJ、みなと気仙沼大使としても活動。2011年4月に発表した「雲の遙か」は震災の前日に完成。気仙沼への思いを歌ったこの曲は、人々を元気づけた。

沼田佐和子

a walk this town!

この街の“今”を探索

唐桑半島ビジターセンター／津波体験館

三陸復興国立公園・唐桑半島の自然と暮らしを紹介する、昭和59年に開館した施設。過去の地震、津波の教訓を後世に伝えることを目的に、映像・音・振動・風などの効果で、津波を疑似体験できる津波体験館が併設されています。

安波山

安波山は標高239mほどの山で気仙沼を一望することができます。震災時にはここに避難した人も多く、当時気仙沼でロケを行っていたサンドウィッチマンの2人も安波山に避難していました。

Fish Market 38*

漁業に根差した文化を守り、漁師の活力を守りたいと始まった取り組み。市場に行く足がない漁師などからも集荷に行くことで魚を買い取り、飲食店などに卸しています。メールや電話での注文で個人宅への直送も行っています。

気仙沼大島大橋(愛称:鶴亀大橋)

気仙沼大島は、人口約2,500人の東北最大級の離島。震災時、島民が孤立した経験から橋の必要性が再認識され、架橋事業が進められています。2019年内には橋が開通する予定です。

かもめ通り商店街

気仙沼市鹿折地区のかもめ通り商店街は、60年余りの歴史を持つ古い商店街で、かつては30店舗以上が軒を並べていました。震災時に壊滅的な被害を受けましたが、2017年に、6店舗で再スタートを切りました。

気仙沼市



気仙沼内湾と復興途中の街並み(安波山からの眺望)

the 応援職員

PROFILE

気仙沼市 建設部 計画・調整課 調整係
いちかわ たくや
市川 拓弥 さん
千葉県千葉市より気仙沼市に派遣

気仙沼市全域の事業の調整にやりがいを感じる。



基礎撤去前の移転元地。



市川さんが携わる「事業全体のマップ」。

「入庁1年目から希望を出して、4年目でやっと来ることができました。そう話す市川さんは2017年4月、千葉市から気仙沼市に派遣職員として配属されました。建設部計画・調整課では、気仙沼市内全域の被災地復興管理支援事業や移転元地の基礎撤去などに携わっています。千葉市での担当事業は港湾エリアに集中していましたが、気仙沼市では全域に大きな事業がいくつもあるため、調整課の業務は多岐にわたります。一つは、事業の全体像を市民のみならず、各事業をマップにとりまとめ、「見える化」を図っています。また、工事で搬出される土の量や時期等を把握するための土量調査、移転元地での資材置き場や仮設事務所設置に係る各事業者の要望調整などの

対応をしています。「千葉市では工業港の千葉中央港で、旅客船ターミナルや橋整備などに携わっていたので、調整課からいろいろ聞かれる側だったんです。今は調整する立場になり、個々の事業だけ見ているのは事業が進まないということが分かりました。調整の大事さを実感しています」。

市川さんの祖父は、全国有数の生鮮カツオ水揚げ港である千葉県勝浦市に住んでいます。水揚げ日本一の気仙沼市に来たときは、親近感を覚えたそうです。「気仙沼市のみならず、このまちと海にとても誇りを持っていらっしゃるのを強く感じます。「気仙沼のまちと港はもったいところだった」という話を聞いたとき、復興に関わる方たちの姿を見て、より力になりたいと思いました」。

「いろいろな地域から来た他の派遣職員の方や、さまざまな業者の方などに関わる中で、勉強する機会がとて多く自分の糧になりました。気仙沼市の経験を、千葉市に戻っても活かしていきたいですね。また、任期が終わって千葉市に戻っても、気仙沼市を訪れようと思っています。形は違えども「観光」という形で少しでも復興に携わっていきなさいです」と話してくれました。

記者の視点

震災後の港町に起きたちよつとした奇跡 熱い思いで立ち向かい 若者呼び込む



筆者プロフィール
河北新報社気仙沼総局
おおはし だいけい
大橋 大介さん
1976年生まれ。仙台市出身。
2001年入社。気仙沼総局



気仙沼漁港に停泊する漁船

「いふんと熱い人だと思った。若い頃には、ドラマの脚本家を目指していたとか。なるほど、読ませる文章が書けるわけだ。」

気仙沼市の遠洋・近海漁船会社でつくる宮城県北部船主協会が職業紹介を担う事務局長の吉田鶴男さん(47)。東日本大震災後、この魚の街で、ちよつとした奇跡を起こしている。

後継者不足が深刻な遠洋漁業。震災前、協会が会員につないだ新規就労者は毎年1人いるかどうかだった。震災後、20、30代を中心に約100人が船に乗った。大半は吉田さんが2012年2月に開設したブログ「漁船員になろう!」に感化された若者たちだ。

若い漁師の心情をつづったり、仕事の中身を分かりやすく解説したり。更新回数は約500回に及ぶ。

津波で壊滅的な被害を受けた街を歩き、何度も涙を流した吉田さん。あ

る晩若者で活気づく港の夢を見たという。「もう一度若者であふれる気仙沼を取り戻す!」との強い信念を持ち、ブログを始めた。思いは全国の若者に伝わった。

気仙沼市魚市場の17年の水揚げ量は約7万4000トン。震災前10年比の約7割と水産業の復興は道半ばだ。一方で、震災をきっかけに魚の街で起きた新たな動きは見逃せない。水産加工業者らは共同で、付加価値の高い商品の開発を続ける。若者の雇用の場を増やすためライバル同士が手を組む動きは、震災前には考えられなかったという。

サンマの大不漁など心配なニュースも多い。ただ、吉田さんたちのように気仙沼には熱い思いで水産業の復興に立ち向かう人たちがいる。港町の未来はそれほど暗くはない。

子どもへの防災教育のヒント

1 怖がらせずに伝えよう!

災害を「恐ろしいこと」ではなく、「地球の営みの中で起こること」として伝えましょう。ショッキングな映像や恐怖心をあおる表現ではなく、幼い子どもが興味を持ちやすい優しい表現を選ぶことが大切です。

2 繰り返し読み聞かせ、子どもの気付きを大切に!

絵本は繰り返し読み聞かせることで、自然と内容が入ってくるもの。「どうしてこうなると思う?」「こういう時はどうしたらいいと思う?」と問いかけ、考えを促しながら読み聞かせ、子どもの気付きを引き出しましょう。

備えの大切さを学ぶ “減災絵本「リオン」”

地球の恵みと災害が隣り合わせであることを伝え、そこから備えの大切さを学ぶ絵本を作成。「体を守る」「速く逃げよう」など、印象に残る言葉で防災意識を芽生えさせます。またミヤギテレビが宮城県内の小学1年生に配布する防災・減災ハンドブック「おももりてちょう」を監修するなど、子どもへの震災伝承に積極的に取り組んでいます。



自分の命は自分で守る!

NOW IS. 防災

宮城県各地で行われている
防災・減災の取り組みから、
日々の備えに生かせる
ヒントを探していきます。

【取材協力】

NPO法人「防災士会みやぎ」副理事長 黒田典子 さん
フリーアナウンサー。「防災士会みやぎ」では防災研修、減災絵本の読み聞かせを担当。防災イベントのコーディネーターやパネリストも務める。



【お知らせ】

「防災士会みやぎ」では減災絵本「リオン」を頒布中。購入希望の方はHPを参照の上、Eメールでお申し込みください。http://bousaishi-miyagi.org/ehon@bousaishi-miyagi.org (防災士会みやぎ)

info/area

{エリア情報} 復興や防災にまつわるニュースをお伝えします

三陸沿岸道路 (大谷海岸IC~気仙沼中央IC) が開通

2018年3月25日、三陸沿岸道路の大谷海岸IC~気仙沼中央ICが開通します。2016年から三滝堂IC~志津川IC、2017年3月には志津川IC~南三陸海岸ICが開通しています。全線開通に向けて、物流や医療、観光などの発展に、大きな期待が高まります。



震災伝承の地 完成へ向け一歩

気仙沼向洋高校旧校舎等を利用した震災遺構の保存整備、(仮称)震災伝承館建築工事、岩井崎プロムナードセンター災害復旧工事の着工にあたり、安全祈願祭が2018年1月24日に行われました。減災・防災教育の拠点と、市の自然や文化などを学べる施設として2019年3月に完成する予定です。



今月のガイド

唐桑半島
ビジターセンター
くまがい よう
熊谷 洋 さん



「津波体験館」は、11分の映像とともに津波の音、振動、風で疑似体験できる世界最初の施設として、1984年に建設されました。2013年に全面リニューアルし、新たに東日本大震災の映像や住民の証言を追加し、より防災教育を重視した内容になりました。

熊谷さんは幼い頃から津波の恐ろしさを、津波体験館や大人の口伝で育ちました。気仙沼市はリアス式海岸の海と豊かな山々に抱かれています。「自然の恩恵を受けるといことは、自然の影響を受けるとい認識を持つことが大事。多くの方に津波のメカニズムや疑似体験、過去の津波を学んでもらいたい。防災・減災の意識を高めてもらいたいですね」。

観光して、 関わって、住んで、 気仙沼・唐桑の 力強さを感じてほしい。



(上)「Pen.turn女子」のメンバー。それぞれが地域で仕事をしながら、祭りやイベントにも参加し、地域の魅力を発信しています。
(左) 根岸さんがはじめて唐桑に来た時に宿泊し、今も「第二のオフィスです」と話す民宿「つなかん」。
(右) 地元の中高生に向け、漁師体験や農家体験などを行う「地域協育」のワンシーン。

自分の経験を活かし 移住や次世代育成の取り組みを

「気仙沼のおもしろいところは、外から来たヨソモノを受け入れる文化があるところ。遠洋漁業の基地として発展したまちだからだと思うのですが、懐が深いように感じています。私が住んでいる唐桑地区は、海で海外とつながっているんです。遠洋漁業の漁師さんの家に遊びに行くと、海外のブランドが並んでいたり、はく製があったりする。性格もラテン系の人が多くて。」

根岸さんは、1年間大学を休学して唐桑地区で活動し、卒業後、唐桑地区に移住。「一般社団法人まるオフィス」の立ち上げメンバーとして、気仙沼地域全体を盛り上げる事業を行っています。現在根岸さんが関わっている事業は大きく分けて二つ。一つは、気仙沼市に移住する人を増やす取り組みです。「移住・定住に興味がある人を支援したり、空

き家バンクの役割を担ったりしています。私のように震災時に気仙沼にボランティアに来ていた人などを集めて、東京で交流会を開催することもあります。気仙沼に縁がある人のきっかけづくりをしたいと思います。」

もう一つは、地元の中高生、高校生を対象とした漁師体験事業。この取り組みは、漁師さんの言葉から始まったそうです。「以前は、観光客向けのブルーーツーリズムを行っていたのですが、それに協力してくれていた漁師さんが『実は、おれたちが本当に教えたいのは、地元の子どもたちなんだよ』ってつぶやいたことがあって。そういえば、気仙沼に住んでいても、漁師が実際にどうしているか、知らない人がいっぱいいるんですよ。次世代に漁師の仕事を継承したいという気持ちを、お手伝いしたいと思いました。地元の学校に告知し、月1回漁師体験を実施。2年たち、「漁師になりたい!」と話す子どもたちも出てきたと言いま

す。「今年は、漁師を目指したいと思う子を対象に、もう少し専門的なことも学べる『漁師の特進クラス』をつくろうと思っています。私は移住をきっかけに漁師さんのおもしろい話を聞く機会がありましたが、そうでない人もたくさんいます。漁師さんの生活を、地元の子どもたちに知ってほしいですね。」

根岸さんは、同じく唐桑地区に移住してきた女子たちと一緒に「Pen.turn女子」というグループをつくりました。Pen.turnとは、半島を意味する「Peninsula」と、移住を意味する「Iターン」を組み合わせた造語。遠洋漁業の漁師が建てた古民家、通称「唐桑御殿」をシェアハウスとして活用しながら、気仙沼や唐桑地区のおもしろさを発信しています。「私は、気仙沼を支える『活動人口』を増やしたいと思っています。移住するだけじゃなく、東京にいてもどこにいても、気仙沼のために関わってくれる人を増やしたい。漁師町ならではの原風景や力強さを、発信していけたらいいなと思っています。」

みやぎ移住ガイド MIYAGI MIGRATION GUIDE

“もっと都会な場所もある
もっと田舎な場所もある”でも、私は宮城に住む。”

県では、本格的に移住を考えている方、移住を検討している方と地域をつなぐ場を作るため、ウェブサイト「みやぎ移住ガイド」を公開しています。実際に宮城県に移り住んだ方の声をクローズアップし、移住のイメージをより具体的に提供いただけるコンテンツを揃えていますので、ぜひご覧ください。

詳しくは [みやぎ移住ガイド](https://miyagi-ijuguide.jp/) で検索 (https://miyagi-ijuguide.jp/)



PROFILE

移住ガールズ「Pen.turn」/一般社団法人まるオフィス

お話し 根岸 えまさん

1991年東京生まれ。2015年に大学卒業後、気仙沼市唐桑に移住した。SNSやブログなどで、唐桑の人々の表情や移住女子の毎日を発信中。

01 「復興」の先を考えるミーティング in 仙台を開催します!

県では、震災復興支援に取り組むNPO等の活動を知っていただくため、「宮城県NPO等による絆力を活かした震災復興支援事業」に取り組む15団体の事業報告会及び交流会を開催します。東日本大震災により被災された方、社会貢献活動に関心のある方など、多数のご来場をお待ちしております。

日時/2018年3月15日(木)10時から17時まで
場所/せんだいメディアテーク1階
費用/無料
申込み/認定NPO法人杜の伝言板ゆるる ☎.022-791-9323

● 県共同参画社会推進課 ☎.022-211-2576



02 みやぎ被災者生活支援ガイドブックを発行しました

震災により被災された方々の生活再建に係る各種支援制度の概要と、その問い合わせ先を掲載した「みやぎ被災者生活支援ガイドブック(平成30年1月版)」を発行しました。ガイドブックは、応急仮設住宅にお住まいの方などに順次お届けします。また、県や市町村の窓口等で配布するほか、県ホームページでもご覧いただけますので、どうぞご利用ください。

● 県震災復興推進課 ☎.022-211-2408



MEDIA INFORMATION

みやぎ復興情報ポータルサイトを
「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信します。

http://www.fukkomiya.jp

今月のブログピックアップ



いわたかれん 復興フォト 岩田 華伶

仙台市出身の女優。AKB48を卒業し、被災地の「今」を伝えたいと写真の勉強を始めた。



これまでの被災地訪問は80回を超える岩田さん。「写真」に願いを込めて、月1回被災地の状況を発信しています。今回は石巻市。隠れ家風なアートギャラリー「キワマリ荘」を訪れました。

宮城発! 元気と食の 最新情報

一般社団法人 IkiZen

震災復興に軸足を置き、被災地の企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。



このブログでは、被災地企業や団体のさまざまな取り組みを発信しています。今回は、仙台市荒浜に「体験型レジャー農園」をつくらんと取り組んでいる「荒浜のめぐみキッチン」をご紹介します。

詳しくは、「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧ください。

- いまを発信! 復興みやぎ SNS「いまを発信!復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしております。ハッシュタグ「#fukkomiya」をつけて、撮影した画像をお寄せください。
- NOW IS.メールマガジン NOW IS.の発行日(土日・祝日のときは翌平日)にメールでお知らせします。 [NOW IS.メールマガジン](#) で検索して登録!



忘れないで。すぐに逃げて。

昔から津波が頻発する気仙沼。育美さんも「地震が来たらすぐ逃げろ」と言われ続けていました。「それでもあの時、パニックになり、逃げ始めるまで数十分かかりました。.....あと少し遅れたら。海の凶暴さを痛感したと言います。「忘れるのは自然なこと。でも、あんなこと二度と起きてほしくない。一人でも多くの人に助かってほしい。とにかく逃げて。私たちは自然とともに生きています。」2回目の3.11。身の引き締まる季節です。



Vol.

23

March, 2018

ナウイズ
毎月11日発行

宮城は^{いま}現在も
^{いま}現実に
立ち向かう。

NOW IS.



まちのパワーに 惚れ込んで。

根岸えま

移住ガールズ「Pen.turn」

「こういうカッコいい大人と一緒に働きたいと思ったんです。不安はなかったです。ワクワクだけ!」。根岸えまさんは、東京生まれ東京育ち。東京の大学に通っていたとき東日本大震災が起これ、ボランティアで初めて気仙沼を訪れました。「まちがひとつ消えるってどんな状況なのかな、と思って来たんです。その時は、かれき撤去のお手伝いをしたり、地域の運

動会に参加したりしました」。いろいろな人に接するうちに「まちのパワー」のようなものを感じ始めたと言います。

「まちのことを自分ごとみたいに考えて、ここをどうにかしなきゃ、ここから何か始めようという人たちを見て、私も住んでみたい!」って。1年間休学して、留学する代わりに気仙沼に来たんです。